

<研究報告>

ネイチャーライティング及び環境文学の教育的意義 —雪上キャンプ実習での「交感」の体験を通して—

平田理恵¹ 信州大学教育学部野外教育コース
瀧 直也 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：ネイチャーライティング，環境文学，自然，場所の感覚，交感の原理

1. はじめに

レイチェル・カーソンは、「センス・オブ・ワンダー」¹⁾の中で自然界を探求する意義について「人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐくみ強めていくことにはどのような意義があるのでしょうか。(中略)わたしはその中に永続的で意義深い何かがあると信じています。地球の美しさと神秘さを感じとれる人は、(中略)人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてないでしょう。たとえ生活のなかで苦しみや心配ごとにであったとしても、かならずや、内面的な満足と、生きることへの新たな小道を見つけだすことができると信じます。」と述べている。自然の中で活動を行うことは、自然から安らぎを得たり、自然に挑むと高揚感を得られたり、様々な効果があると考えられる。

平成8年中央教育審議会は、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」²⁾の中で、「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を『生きる力』と称することとし、これらをバランスよく育てていくことが重要であると考えた。」と記している。「センス・オブ・ワンダー」でカーソンのいう「地球の美しさと神秘さを感じとれる人は、(中略)人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてない」という一文と、中央教育審議会のいう「子供たちに必要となるのは、(中略)他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」という「生きる力」を説明した部分は共通点が多く、特に、カーソンの「『地球の美しさ』と『神秘さを感じとれること』」は中央教育審議会の「感動する心」に近く、カーソンのいう「人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてない」ことは中央教育審議会の「生きる力」とも捉えることができ、ネイチャーライティング及び環境文学には「生きる力」を育む教育的意義があるのではないかと考えられる。

しかし、上岡³⁾が「環境文学の意義や理念をどのように教育するか、またその教授方法

¹ 現所属：長野県安曇野市立豊科南中学校

に関する論考はほとんど目にすることはない。一方、アメリカでは *Teaching North American Environmental Literature* (2008)⁴⁾ をはじめとして、環境文学教育やその教授方法を扱った書が幾冊か出版され、そこで提案された教授法が広く浸透している。日本においてこの分野の研究が著しく遅れていることを痛感せざるをえない。」と述べているように、日本ではネイチャーライティング及び環境文学が教育という位置では論考されてこなかった。また、ネイチャーライティング及び環境文学は初めからその分野の存在を意識して書かれたテキストではなく、高橋ら⁵⁾ は、「ネイチャーライティングとは、自然と人間とのかかわりを省察する一人称形式によるノンフィクションを指している。また特に、環境文学と言う場合には、ノンフィクションから詩や小説や演劇まで自然がクローズアップされるすべての文学を含むことになる」と述べており、これらに該当する文学をカテゴライズし始めたのはここ 20 年余りのことである。よって、まだ教育現場への浸透は薄く、現場で扱われているテキストがネイチャーライティングまたは環境文学であっても、それが意識されずに用いられている現状がある。

本研究は、人が自然から「生きる助けとなる力」を享受する際、(ネイチャーライティング及び環境文学における)「内なる自然」と「外なる自然」の呼応である「交感の原理」と、人がある場所にアイデンティティを獲得する「場所の感覚」が媒体となることを検証する。

また、ネイチャーライティング及び環境文学には自然へと読者を誘う力があることを明白にすることで、これまであまり論じられてこなかったネイチャーライティング及び環境文学の教育的価値を見出し、これらが広く教育に用いられ、子どもや自然経験の少ない者を含む多くの人が自然へと向かい、自然から「生きる助けとなる力」を享受する方法を明らかにすることを目的とする。

2. ネイチャーライティング・環境文学

2.1 ネイチャーライティング

ネイチャーライティングとは、環境文学のひとつであり、テーマを「自然」としたノンフィクション形式のエッセイである。野田⁶⁾ が「ナチュラルヒストリー(博物誌)が可能な限り観察主体を縮小して観察対象それ自体の記述(客観化)へ向かうのに対して、ネイチャーライティングは観察対象と観察主体の相互的な関係、自然と人間との交感的関係の記述へと向かう」と述べているように、H.D. ソロー⁷⁾ が「森の生活」を発表する以前は自然科学的データのみで述べられた自然の事象は博物誌の系譜に分類された。ソローにより、博物誌に書かれたような客観的な情報に加え、個人的反応、思想的、哲学的解釈などが加えられるようになり、ネイチャーライティングという一つの手法が確立する。

環境文学の根底の「場所の感覚」という概念は、人間が場所との関係においてアイデンティティを獲得、あるいは再認識する行為の中心にある感覚である。「場所の感覚」の「場所」とは自己の存在と関連した形で存続する場所で、H.D. ソローの「森の生活」のようにウォールデンの森という住んだ場所であることもあれば、記憶の中や、遠く離れても思い続ける

場所、育った町など、人間の生を支え、帰属すべき空間なら、風光明媚な場所ばかりでなく、水俣や福島のように公害や放射能汚染を被った場所であっても、個人にとって心の拠り所、帰属する所であるならそれになりうる。「場所の感覚」は、自己の「場所」としての「故郷」を「空間」「場所」に転じたとき、その場所における関係性を相互的に受容しているという安定感を獲得して、「居場所」へと醸成されたときに感じる認識でもある。ネイチャーライティングはこの居場所が自然のある場所に限定され、自分は自然のなかの一部であり生態系の一部として自己を知り、延いては「自分は誰か」という認識へと発展する。

科学雑誌や新聞の情報だけでなく、そこに思想や意見を自由に反映させているのが文学である。文学を通して「自然と人間の間を関係を考えること」は、自然の中にある故郷や大切な心の「居場所」について考え、行動する指針をその思想や意見の中に見出す行為である。伊藤⁸⁾が「自己組織系としての自然を他からの強引な干渉によって歪めてしまうのが公害であり環境破壊なのである。(中略) 育てること、育成することは必要である。(中略) しかし自然の自己組織系をこわしてはいけない」と述べているように、かつて日本の里山は人の手が加わって均衡を保ってきた。

しかし今、その思想や歴史は無視され、人工林がつくられ、手入れがされなくなった山では、土砂災害や生態系の乱れが深刻化している。日本で今おきていることはソローの住んだニューイングランドの手つかずの自然と異なり、レイチェル・カーソン⁹⁾が「沈黙の春」に記したような農薬漬けの大規模農業の時代とも異なる。しかしそこに描かれた思想は私たちが行動を起こすヒントとなり得る。自然の中にある大切な「居場所」と人間との関係がこじれ、何か考え行動をおこす必要に迫られたとき、ネイチャーライティングに記された思想の果たす役割は大きい。

2.2 環境文学

環境文学とは、環境と人間との関係をテーマとする文学である。小説、エッセイ、詩、戯曲など、ジャンル、形式は多岐にわたる。既存の文学作品を「環境」という視点から読み解き、分類されることが多い。環境文学での「環境」とは主に自然環境であり、その中でもノンフィクションのテキストは「ネイチャーライティング」に分類される。

(1) 環境文学は「場所の感覚」と「交感の原理」があるテキスト

環境文学では「場所の感覚」と「交感の原理」がテキスト上にあることが前提となる。まず「場所の感覚」の「場所」とは、土地ではなく、人間とその活動を組み入れた生態系を構成する所であり、人間が「場所」との関係においてアイデンティティを獲得、または再認識する際、その「場所」が中心となる感覚が「場所の感覚」となる。「交感の原理」とは、人間の世界の出来事と自然の現象との間には、つながりや関係があるという思考であり、特に「人間と自然の間に何らかの対応関係を読みとる」ことを「交感」と呼ぶ。自然への志向は、一見外部へのみ向かうように見えるが、「交感の原理」では、結果的にそれとは反対方向の、心の内部へと向かうものだと言える。人間の外にある自然から「表象」

という皮をはぎ、自然本来の存在まで、深くありのままを見たとき、人間と自然との間に交感の関係が生まれ、これにより人間本来の姿である、深い内側まで辿り着ける。フィジックスの視点に立つと、人間と自然は他者だが、「交感の原理」はこの対立を解消するメタフィジックスな視点を持ち、外観と内観、自然と超自然、風景とヴィジョンなど、一見反目する二項の対立を解消し、つながりを持たせるからだ。このことは「交感の原理」が顕著に見られるソロ⁷⁾の「森の生活」や、表象を超えた世界を追求したアニー・ディラード¹⁰⁾の「ティンカークリークのほとりで」などの作品が証明している。

(2) 様々な嗜好の人に向け、環境について、作者のアイデンティティを広く発信

環境と人間の間にある「場所の感覚」や「交感の原理」を万人に理論で伝えることは難しいが、文学を使用すれば、宮沢賢治の「注文の多い料理店」¹¹⁾や「やまなし」¹²⁾のように、老若男女に親しめる形態によって、概念でなく感覚として子どもにも伝えることも可能だ。様々な嗜好の様々な人に向け、環境について、作者のアイデンティティを広く発信できる環境文学の役割と価値は大きい。

2.3 文学を通して環境と人間の間を考える

一般的には人間のまわりにあるものが環境であると捉えられ、環境と人間の間には境界線があると考えられる。環境と人間を差異化した、人間中心主義的な視点で環境を見ることが一般的であり、人間優位に語られることが多く、人間の居住性や経済資源に結びつくもの、生活の一部としての関係であると主に思われている。近年、環境汚染への警鐘が鳴らされるようになると、「環境と人間の間には境界線がある」という考えだけでなく、「人間は環境の一部である」と見る向きも増えた。しかしこの「人間は環境の一部である」との考えは新しいものではない。小谷¹³⁾らが「人間が大地という共同体の征服者でなく、単なる一員であるということは、西洋の伝統を新しい方向へ導く概念であるが、これは多くの先住民の文化を前提とする考えであるし、この原則は昔の知恵を反映した仏教の伝統の中で天台宗などが強調する『山川草木悉皆成仏』という表現にもあらわれている」と述べているように、先住民や日本人にとって、人間が環境の一部であるという感覚、また、この感覚に基づく関係が、古くから存在してきたことも事実である。

環境と人間の間を考えるうえで環境文学を媒体としたとき、環境と人をつなぐ「交感の原理」が作用し、「わかる」「気づく」「共感する」といったごく自然な感覚で、その環境にアプローチすることができる。シンポジウムへの参加や、自然の中で暮らすことで環境を考えることもできるが、万人にできることではない。しかし環境文学を読むことなら、様々なジャンルや形式から好みの話を選び、一日数十分の読書でも気軽に環境を考える機会が得られる。また環境に対する考えを発信する場としても、文学というエンターテインメント性の高い媒体は、人々の関心をひきやすく広く伝えることができる。文学を通じて、環境と人間の間を考えることは、万人に許された自己の探求の機会でもある。

3. 研究方法

3.1 文献研究 -ネイチャーライティング・環境文学の歴史と系譜-

これまでのネイチャーライティング及び環境文学の系譜を紐解き、ネイチャーライティングや環境文学がいつ頃より書かれているのか、また、いつからこのように分類されるようになったかを、実際のネイチャーライティング及び環境文学のテキストやエコクリティシズムの文献の内容の変化の過程を年代をおって検証した。加えてネイチャーライティング及び環境文学についての先行論文、学習指導要領との関係、教科書への登用例などについても検証し、日本の教育にどのように取り入れられてきたかを考察した。

3.2 アンケートによる質的データ分析-雪上キャンプ受講者の感想とネイチャーライティング及び環境文学の文脈の類似性-

(1) 調査の概要

信州大学教育学部「雪上キャンプ実習」における雪中ソロ泊は、H.D. ソローがウォールデンの森で孤独に自然と対峙した生活を疑似体験できる貴重な機会であり、この経験でネイチャーライティングや環境文学における「場所の感覚」や「交感の原理」が起こりえるかを調査する機会と捉え、実施したものである。

(2) 調査対象

調査対象者は、信州大学教育学部において2017年度後期に開講された「雪上キャンプ実習」の受講者33名である。内訳は表1の通りである。

表1 雪上キャンプ実習受講者内訳

| | 2年 | 3年 | 4年 | 計 |
|----|----|----|----|----|
| 男子 | 3 | 7 | 2 | 12 |
| 女子 | 7 | 14 | 0 | 21 |
| | 10 | 21 | 2 | 33 |

(3) 調査場所、調査日程

2月末から6日間、国立妙高青少年自然の家で開講された信州大学教育学部「雪上キャンプ実習」の受講者33名を対象にアンケート調査を行い、その結果を質的データ分析法を用いて8項目に分類した。主な活動内容はテレマークスキー、雪上キャンプ、雪崩講習で、自然への造詣を深めた後、通信機器や時計なしでビーコンと最低限の荷物だけを持ち、雪洞を掘ってソロ泊をする。このソロ泊が6日間のうち最も自然を体感する時間となる。アンケートは最終日の昼食前のふりかえり時に施設内で実施した。詳しいプログラムは表2の通りである。

(4) 調査用紙…アンケート用紙（自由記述法）

質問1は雪上キャンプ実習全体について、質問2は最も濃密な自然体験になると予想される雪中泊について問う形にした。いずれも、「〇〇のとき、〇〇を思い出した」という形の例文をつけ、「〇〇のとき」は、「夜雪が降ってきたとき」など、ネイチャーライティング

及び環境文学における実際の自然である「外なる自然」を意識した内容とし、「〇〇を思い出した」は「心細くなって一人で留守番していた子どもの頃の夜を思い出した」など、「思い」や「思い出」を意識させる内容として、「『外なる自然』を見たとき『内なる自然』を感じた。」という形を促す内容とした。

表2 雪上キャンプ実習日程

| | |
|-----|------------------------------------|
| 1日目 | テント設営／野外炊事 |
| 2日目 | テレマークスキーでの雪上ハイキング／雪上テント泊 |
| 3日目 | 雪崩講習（埋没体験／ビーコンの使い方など）／雪洞講習／雪上テント泊 |
| 4日目 | 雪上にてソロ活動／雪洞づくり／雪洞にてソロ泊（時計，通信機器禁止） |
| 5日目 | ソロ活動（10時まで）／スノーシアターづくり／スタンプ／雪上テント泊 |
| 6日目 | 片付け／ふりかえり |

4. ネイチャーライティング・環境文学の歴史と系譜

4.1 ネイチャーライティング・環境文学の歴史

(1) 博物誌からエッセイへ，ロマン主義から環境思想へ

ロマン主義は、18世紀末から19世紀前半にヨーロッパで、その後はヨーロッパの影響を受けた諸地域で起こった精神運動の一つで、それまでの理性偏重、合理主義などに対し感受性や主観に重きをおいた一連の運動であり、古典主義と対をなす。ロマン主義的自然観について石幡⁵⁾は「18世紀までの自然は生きるために征服されるべき存在であり、中世には母なる女神として畏怖の念を伴って神格化された。科学の発達によって人間は自然を手名付け、ロマン主義時代には自然は心なごむ景観としての意味を加え、緑がその色彩の象徴となる」と述べている。こうした流れを汲み、それまでの博物誌に、心なごむツバメのエピソードなど主観を投影させたのがギルバート・ホワイト¹⁴⁾の「セルボーン博物誌」（1789年）であり、後に「ネイチャーライティング」の起点となったと言われる。

林学や産業が発達を遂げ、ロマン派の時代からの転換期に、ドイツのヤーコブとヴェルヘルムの兄弟¹⁵⁾によって書かれた童話集が「グリム童話」である。200編中、93編に森や林が登場し、森林に「場所の感覚」がある作品が多い。ドイツ人にとって森林への思いは、古代は神秘的で畏敬の念のある場所であり、ロマン派の時代は憧れの場所、その後実用のために人工的に針葉樹の森が造られ、産業の対象となっていく。「グリム童話」の「ヘンデルとグレーテル」¹⁵⁾を例にとると、森への恐怖（災害、貧困）は魔女や継母（初版は母）の仕打ちとして、恩恵（そこで育てられたこと、助けられたこと）はお菓子の家として描かれ、当時のドイツ人の森林への意識が伺える。

1854年、自然に孤独に対峙した日々を綴ったH. D. ソローの「森の生活」が発表され、それまでの博物誌ではなく、人間がいかにか自然を受けとめ、どのように自然と関わってきたのか、その関係性を主題とするエッセイ形式で自然への思いを語るテキストとして、ネイチ

チャーライティングの最高傑作またはネイチャーライティングの源流と言われるようになる。

それはエッセイ形式のノンフィクションのみであったが、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」のような化科学的データに基づいた記述の序章に「明日のための寓話」⁹⁾のようなフィクションが入っているように、データや事実にフィクションを交えたこともあり「沈黙の春」は社会に大きな波紋を投げかけることとなる。（「明日のための寓話」のように、自然を主題にしているがフィクションを含むテキスト、自然以外に「場所の感覚」のあるもの、詩、小説などエッセイ以外のテキストは「環境文学」と呼ばれることになる。）カーソンは初め、海洋学者の観点から海にまつわる知識のすべてを詰め込んだ「われらをめぐる海」を1951年に発表し一躍有名になるが、文学的感覚に優れ、作家を志していたカーソンの書く海洋学の著書は最初「叙情的過ぎる」との批判もあった。しかし自然の事実に著者の思いを投影させたテキストは、まさにネイチャーライティングの視点で書かれたものと言える。「われらをめぐる海」の成功で1941年発表の「潮騒の下で」が再評価され、その後1955年「海辺」を発表し、「海の三部作」¹⁶⁾と呼ばれる。

カーソンは亡くなる寸前まで姪の子どものロジャーと自然に親しんだ日々の思いを記録、それはカーソンの没後の1965年「センス・オブ・ワンダー」¹⁾として発表され、日本語版ではそのタイトルは「神秘さや不思議さに目を見張る感性」と訳された。エコロジカルなアイデンティティを美しい自然の写真と共に綴った本はベストセラーとなる。これは海洋学者の視点に叙情的感性を加えた「海の三部作」の作風や、「沈黙の春」のように社会に警鐘を鳴らすものとは異なり、外に見える実際の自然「外なる自然」を見て、心に描かれた「内なる自然」が呼応する、ネイチャーライティングの基礎となる「交感の原理」を顕著に現れている。これは姪の息子で自身の子どものようにかわいがったロジャーとの日々が大きく影響しており、未来を担う子どもたちへ向けた内容が随所に見られる。子どもたちの自然への感性についてカーソン¹⁾は「知ることは感じることの半分も重要ではない」と述べており、これは表象する前の自然をそのまま感じる感性のことで、環境教育の原点と言える。

(2) 日本の環境文学・ネイチャーライティング

松尾芭蕉の「奥の細道」¹⁷⁾（1702年）は芭蕉が巡った地の「外なる自然」を見て、芭蕉の心の内に浮かんだ「内なる自然」が語られ、五七五の言葉の中に凝縮されたノンフィクションであり、十二分にネイチャーライティングといえるものである。「奥の細道」は現在、中学校3年国語の教科書に取り上げられているが、現行の学習指導要領¹⁸⁾の「(3)我が国の言語文化に関する事項」には「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界を親しむこと。」とあり、歴史的背景に注意はしているが、環境的背景への注意は記されておらず、環境や生徒自身の心の問題として捉えた環境教育としての教育がなされている可能性は低い。

日本の環境文学では宮沢賢治の作品の全てが環境文学といっても過言ではない。難解といわれる「やまなし」¹²⁾も川底を唯一の住処とし、そこに「場所の感覚」を持つカニの親子の話である。賢治は詩集「春と修羅」¹⁹⁾を詩ではなく「心象スケッチ」と呼び、「心に浮かんだ

風景をスケッチしただけ」と述べていることから、その作品には賢治が暮らし「イーハトーブ」と呼んだ岩手に「場所の感覚」があり、そこで浮かんだ「内なる自然」を言葉でスケッチしていたといえる。「注文の多い料理店」の序で賢治¹¹⁾は、日々の生活の中で里山や林や風の中になると「どうしてもこんなことがあるようでしかたない」ことを書いていただけと述べており、物語の類も心象のスケッチであったと伺える。

戦後の高度成長時代になると、それまでの日本的な思想ではなく、環境問題をはっきりと意識したテキストが登場する。1969年、石牟礼道子が、生まれ育った熊本で発症した水俣病という公害病を、まるで患者が話したかのようにフィクションで表現した「苦海浄土わが水俣病」²⁰⁾が発表される。熊本の方言混じりに語られる水俣病患者の言葉は、病気で話せなくなった患者の言葉を石牟礼が想像して書いたものである。これについて石牟礼²¹⁾は「だって、あのひとの心の中で言っていることを文字にすると、ああなるんだもの。」と述べている。石牟礼道子の文学実践を内藤¹³⁾は「エコロジカル・アイデンティティの探求と捉え、彼女らの作品に『自らが生をいとなむ環境や場所と交渉を重ねながら構築されるアイデンティティ』を指摘する研究もある」と説いている。石牟礼の水俣という場所への並々ならぬ愛着からでた言葉であるとともに、その水俣病の被害の事実をよりわかりやすく伝えようとしたフィクションは「沈黙の春」の冒頭の「明日のための寓話」に共通する。そして石牟礼はこの作品で第一回大宅壮一ノンフィクション賞に選ばれるが辞退。その理由はこの作品がノンフィクションではないことと、石牟礼がこの作品の真の作者は患者だと考えていたことではないかと言われている。

(3) エコクリティシズムという文学批評、シニカルな自然観の登場

「沈黙の春」のようにエコロジーの視点を持ったテキストの出現の10年後、エコクリティシズムという新しい文学批評のジャンルが登場する。伊藤⁵⁾が「エコクリティシズム(生態学的批評)はネイチャーライティングのみならず幅広く環境と文学の関係を研修し、エコロジーの視点を文学に深く取り入れる思想である」と述べているように、エコクリティシズムは新しい文学批評の視点として1978年リュカート⁵⁾の「文学とエコロジー--エコクリティシズムの実験」に初出した。

この直前に書かれたのが1974年アニー・ディラード¹⁰⁾の「ティンカークリークのほとり」である。伊藤が³³⁾この作品に対し「ロマン派が花や鳥を中心的に表象したのに対し、作者の昆虫と自然を搾取するヒトへの鋭い視線は、自然への関心が人間中心的で観念的なものに止まる限り、世界の破滅への道は確実で、自然はその秘密を決して明かす事はないと考えているからだろう。」と述べているように、アニー・ディラードは表象する前の自然を切り取りつつ、そこにシニカルな目線で自然についての考察を述べ、そこに個人的な思いをのせるという新たな自然観を登場させた。

(4) 生態系の根幹を揺るがす原発事故「チェルノブイリ」「フクシマ」以降

1986年に旧ソビエト連邦社会主義共和国のチェルノブイリ原発事故が起きた直後の1987年、ドイツのグードルン・パウゼヴァング²²⁾が「みえない雲」を発表する。西ドイツの平和

な村での突然の原発事故、その下で中学生が経験する原発の恐怖、現実、精神の再生、そして事故後も原発の負の側面から目をそらし、現実を見ようとしぬ祖父母との対立などが描かれる。「日本での『万一』を想像するための手がかりとなります。そんなとき、だれもがまず単純に、この日本版の訳者高田²²⁾は「こわい」「いやだ」という感覚を持つでしょう。まず、この「感じる」ことがスタートです。」と述べている。感じるものがスタートであることは奇しくもカーソンの「センス・オブ・ワンダー」と同じである。その後、実際に日本で東日本大震災による福島原発の事故がおきてしまう。

田口ランディ²³⁾の「ゾーンにて」では、原発事故後の福島の「ゾーン」(厳戒区域)へ取材にいった主人公が「私にはゾーンの方が安らげる。あそこに戻りたいような…気がする。だってあの場所はどん底だから。あれより下に落ちようがない」と、不安に思っ眺めていた場所へ行き、実際に被曝することで、「これ以下の悪い状態にはならない」とゾーンに安心し、ゾーンが特別な場所になっていく。生態系の根幹を揺るがす巨大な力、「核」というエネルギーのこれまでの恩恵と、事故後の巨大な負の側面が、作者または主人公たちにとって、原発のある「場所」、事故のあった「場所」を否応なしに意識させ、福島の厳戒区域「ゾーン」が「人間中心主義」からの「再考」へつながる「場所の感覚」のある所となっている。このようなネイチャーライティング及び環境文学の形が、「チェルノブイリ」「フクシマ」以降度々登場するようになる。

(5) ネイチャーライティング及び環境文学の現状

社会経済活動の影響、チェルノブイリ原発事故、科学的知見やエコロジー思想の浸透など、近年になると環境をめぐってありとあらゆる言語が錯綜し、それに対する批判的な検証が要求されるようになる。こうした状況の中、文学研究の視点から「環境」を追求しようと1992年アメリカで「文学・環境学会」ASLE(アズリー, The Association for the Study of Literature and Environment)が創設された。これに続き1994年に日本でASLE-Japanが結成される。この頃より「自然と人間とのかかわりを省察する一人称形式によるノンフィクション」を「ネイチャーライティング」、「ノンフィクションから詩や小説や演劇まで環境がクローズアップされるすべての文学」を「環境文学」と呼ぶようになる。

ネイチャーライティング及び環境文学と呼ばれるようになったテキストはホワイトやソロー以前になかったわけではなく、こうした分類がなされる以前にも「場所の感覚」や「交感の原理」を持つテキストは多数存在しているし、まだネイチャーライティング及び環境文学として周知されてない作品の中にも、秀逸なテキストは沢山あり、ネイチャーライティング及び環境文学はその研究の歴史の浅さ故、まだ未分化で未発達な部分が多い。

4.2 ネイチャーライティングの分岐点となったテキスト及び代表的テキスト

(1) 「おくの細道」¹⁷⁾ 松尾芭蕉(1706年)

芭蕉の旅の始まりは風雅を極めるためであった。飯田⁵⁾は「おくの細道」について「『おくの細道』に先だって書かれた『笈の小文』には、造化(天地自然)にしたがひ、四時(四

季)を友とすること、花においてもものを見、月においてもものを考えることである、と説明されている。このことから、彼が矢もたてもたまらず深川を飛び出した心境を推し量ることができる。」と評しており、旅の「場所」なしでは芭蕉の句は成り立たないこと、「造化(天地自然)にしたがい、四時(四季)を友とする」という言葉通り、自然が常にテーマであること、自然の事実(外なる自然)に対峙して湧き出た思い(内なる自然)に「交感の原理」が成り立つこと、ノンフィクションであることなどから、「おくの細道」はネイチャーライティングの全ての条件を満たしている。「夏草や兵どもが夢の跡」の句を一つをとっても、夏草に覆われた平泉の自然、そこでかつての戦に思いを馳せる様子に、「場所の感覚」と「交感の原理」が見て取れる。光村図書の中学校3年²⁴⁾の教科書には「夏草—『おくの細道』から」の題目で採用されている。

(2)「セルボーンの博物誌」¹⁴⁾ ギルバート・ホワイト (1789年)

「セルボーンの博物誌」は近代博物誌の古典的名著で、ハンプシャー州サウサンプトン郡の小村で継続された自然観察の集大成である。そこには動植物への愛着の念が述べられ、特にツバメの一文を例にとると「渡りをしたり、歌ったり、驚くべき軽快さを見せたりして、私どもを喜ばせます。」¹⁴⁾と、形容詞を多用しながら自身の感情を表現しており、ネイチャーライティングの起点と言われる。

(3)「森の生活-ウォールデン」⁷⁾ H.D. ソロー (1854年)

ソローがハーバード大学を卒業後、自身の生まれたアメリカ・マサチューセッツ州のコンコードへ帰り、ウォールデン池のほとりの小屋で、2年2ヶ月2日に渡って自給自足生活を送った回想録。自然や湖、動物などの描写だけではなく、人間精神、哲学、労働、社会など幅広い範囲への言及を含む。ソローの死後評価が高まり、1930年代~40年代には、アメリカノンフィクション文学の最高傑作の一つと称される。

(4)「センス・オブ・ワンダー」¹⁾ レイチェル・カーソン (1965年)

レイチェル・カーソンの遺作として、彼女の友人たちによってカーソンの没後出版。カーソンが毎夏の数か月を過ごしたメイン州の海岸や森の自然を、姪の息子ロジャーと探索した記録である。その際のロジャーの反応に、子どもたちにとって動植物の名前を覚えることよりそれを感じる「神秘さや不思議さに目を見はる感性」が大切と説く。

(5)「ティンカークリークのほとりで」¹⁰⁾ アニー・ディラード (1974年)

ディラードが大学時代を過ごしたヴァージニア州ブルーリッジの谷間の「隠者房」と呼ばれるコテージで過ごした記録。その手法はソローの「森の生活」に似ているが、ディラードは表象しない自然のありのままの姿を記録した記述が目立ち、それに加えてシニカルな自然観を述べている。1974年にピューリッツァー賞を受賞し、現代ネイチャーライティングの代表作と言われる。

4.3 環境文学の分岐点となったテキスト及び代表的テキスト

(1)「グリム童話」¹⁵⁾ ヤーコプ・グリム/ヴェルヘルム・グリム (1812年)

代表的作品「ヘンデルとグレーテル」を例にとると。貧しい木こりの一家が、食べ物に困って子どもを深い森へ置き去りにする。二人の子どもはどうやって森をぬけだすかを考え、森の魔女に会い、森を隠れ場所にし、森からの功罪を受けながらなんとか逃げ出す。「森で生活が成り立っている、しかしその恩恵は小さく貧しく、森は恐ろしい」というドイツ人の森への二項対立の思いが全編に作用している。

(2)「注文の多い料理店」¹¹⁾ 宮沢賢治 (1924年)

「わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風を食べ桃いろのうつくしい日光をのむことができます。また私は畑や森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものにかわっているのをたびたび見ました。」¹¹⁾ この序だけで、賢治が暮らした里山の森や畑に「場所の感覚」があり、そこに賢治の心の中の幻想的な心象風景が事実のように投影されていることがよくわかる。しかしながらその内容は山猫という「自然」が、狩りを楽しむ当時のブルジョワ層の傲慢さを罰する内容となっており、自然に対する人間の傲慢さを危惧する賢治の環境思想が伺える。

(3)「やまなし」¹²⁾ 宮沢賢治 (1924年)

2匹の蟹の兄弟と蟹の父親が、谷川の底で話している。賢治はこの冒頭「小さな谷川の底を映した2枚の青い幻燈です。」¹²⁾ と言い切っており、賢治には川底がそんなふうに見えることがわかる。蟹の兄弟にとっての大きな関心事は「クラムボン」の行方であるが、読者には「クラムボン」がなんなのかははっきりしない。しかし蟹たちが暮らす谷川の底の景色にクラムボンや魚がいなくなった恐怖が投影されており「場所の感覚」がはっきりあることがわかる。「やまなし」は昭和46年度版から現在まで、光村図書6年生²⁵⁾に継続して採用されているが、「クラムボン」の存在に焦点が当たることがあっても、教育現場でこれが「環境文学」だと認識される機会はなく、「谷川の底」を主題には語られていない。

(4)「沈黙の春」⁹⁾ レイチェル・カーソン (1962年)

第一章の「明日のための寓話」では、自然に包まれた町から鳥がいなくなり、自然が沈黙するというフィクションからはじまる。その後それと同じことが現実の世界でも起こり始めていること、殺虫剤に含まれるDDTがその主な要因であることなどが、膨大なデータに裏付けされながらノンフィクションで語られる。自らの観察を織り交ぜ、簡潔にわかりやすく述べられていく。アメリカで発売されてから半年で50万部を売り上げ、その後は日本を含む各国でベストセラーとなる。しかし「明日のための寓話」のようなフィクションの部分や、カーソンの私見が多数含まれ、現在であれば環境文学の最高峰ともいえるその文体は、全米科学アカデミーや業界団体からの批判を受け、国論を二分する大論争となる。これを終息させたのは当時のアメリカ大統領のジョン・F・ケネディで、大統領直属科学諮問委員会が8ヶ月の調査を経て、そのテキストの正当性を全面的に認めることとなる。

(5)「苦海浄土-わが水俣病」²⁰⁾ 石牟礼道子 (1969年)

第二次世界大戦後の高度成長を背景に、チッソ株式会社が廃棄したメチル水銀により、

後に「水俣病」と呼ばれる病が頻発。チッソ株式会社が水俣市にとってどんな位置づけであるか、そういった社会的背景からくる患者の苦しみなども踏まえ、現実には口のきけない水俣病患者の言葉を創造し、チッソ社員、行政の言葉などを、当事者が話したようにフィクションで綴っている。それまで主婦であった作者が自身の生まれ育った自然豊かな水俣で起こったこの病を自身の問題として捉え、膨大な取材やデータから、自己の危機感を投影したフィクションであり、その手法はカーソンの『沈黙の春』にも通じる。

(6)「みえない雲」²²⁾ グードルン・パウゼヴァング (1987年)

西ドイツの小さな村を襲った原発事故の悲劇と中学生が体験する核の恐怖が描かれる。チェルノブイリ原発事故直後にヤングアダルト向け小説として発表され、数々の文学賞を受賞。ドイツ国内で150万部のベストセラーとなる。原発推進派の政治家、原子力業界関係者にも読まれ、ドイツやベルギーの多くの学校で国語教材として用いられる。日本を含めた13カ国で翻訳、ドイツでは映画化もされた。実際の事故という印象を与えかねないとの非難や、原発推進派が「このような事故はドイツでは起こりえない」と異議を唱えた。

(7)「ゾーンにて」²³⁾ 田口ランディ (2013年)

作家羽鳥よう子が、福島原発事故の被災者の元牧場主工藤に「ゾーン」と呼ばれる警戒区域内を案内され、取材する物語。羽鳥は工藤の案内で原発事故の現実を体感するうち「ゾーン」への恐怖心は薄れ、むしろゾーンに懐かしさや愛着を感じるようになる。

5. アンケートによる質的データ分析

5.1 雪上キャンプ受講者の感想とネイチャーライティング及び環境文学の文脈の類似性

調査対象者33名全てから回答が得られた。質問1は雪上キャンプ実習全体、質問2はソロでの雪洞泊の体験について回答するよう意図したが、質問1と2の線引きが曖昧な回答が多く見られたためデータ分析はその両方を統括していった。一人平均6件の回答が記入され、191の感想が得られた。すべての回答をエンコーディングすると、①自然への感謝・喜び、②自然への脅威、③自然への驚き、④人との関係、⑤日常生活への思い、⑥今のこと、⑦自己の内面、⑧思い出の8つの指標となった。

「自己の内面」と「思い出」の回答数はそれぞれ38、39であり、他の6項目の17～20の回答数の2倍であった。また「自己の内面」と「思い出」の回答数は全回答人数を超えていることから、この2つの指標に関しては複数回答が多かったことがわかる。このことからほぼ全員の参加者が妙高の自然という「外なる自然」から「自己の内面」「思い出」という「内なる自然」を感じ、「交感の原理」がおきていたといえる。

さらにこの8つの指標の中身をエンコーディングし、下位指標を作成した。結果は図1の通りである。

ネイチャーライティング及び環境文学の教育的意義

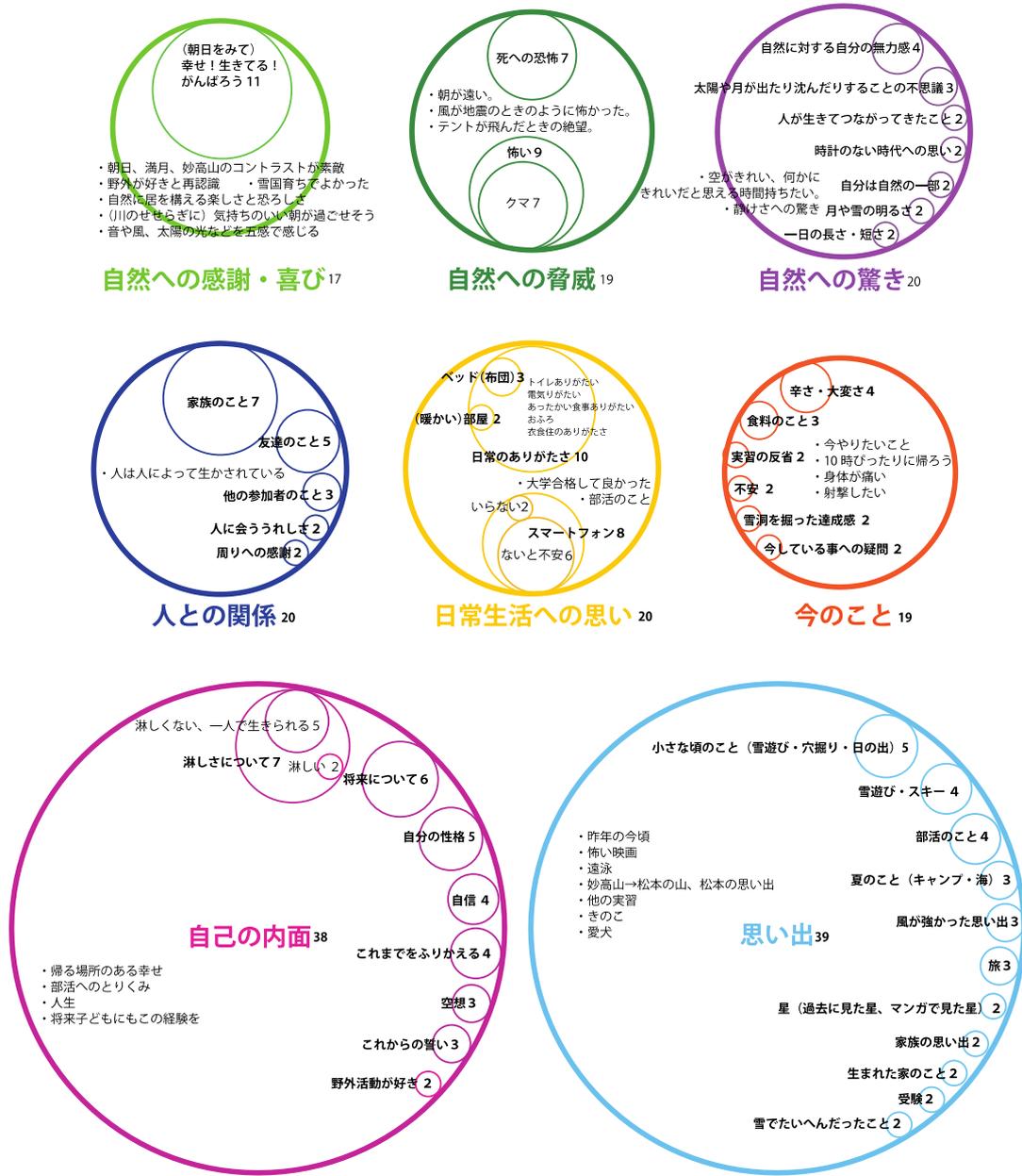


図1 雪上キャンプ受講者感想の8つの指標とその内訳

5.2 ネイチャーライティング及び環境文学との比較

(1) 上位指標とネイチャーライティング及び環境文学の類似点

上位指標のうち、ネイチャーライティング及び環境文学に近いものを実際のテキストと比較した。表3は「自然への驚き」に分類できた回答についてまとめたものである。

「自然への驚き」に分類できた回答はいずれもカーソンの「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」¹⁾に通じ、受講者19人、約58%が妙高の自然に対し、カーソンに類似した「神秘さや不思議さに目を見はる感性」を持ったといえる。

表3 上位指標とネイチャーライティング及び環境文学の類似点

| 上位指標 | 下位指標 | 調査対象者の記入例 | 類似したネイチャーライティング または環境文学のテキスト |
|--------|---|---|---|
| 自然への驚き | <ul style="list-style-type: none"> ・自然に対する自分の無力感(4) ・太陽や月が出たり沈んだりすることの不思議(3) ・人が生きてつながってきたこと(2) ・時計のない時代への思い(2) ・自分は自然の一部(2) ・月や星の明(2) ・1日の長さ・短さ(2) ・他(3) | <p>キャンプをしている時に見た空はいつも見ている空と同じなのに、山の上では本当にきれいに見えて、普段の生活の中では隠れていた、気付いてないだけだったんだと思った。こうやって空をゆっくり見上げる時間をとることができたのは久しぶりだったので、忙しい日常の中でも何かを見て純粋にきれいだなと一つの思いに浸る時間を持ちたいと思った。(3年女子)</p> | <p>「地球の美しさと神秘さを感じとれる人は、(中略)人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてないでしょう。たとえ生活のなかで苦しみや心配ごとにてあったとしても、かならずや、内面的な満足と、生きることへの新たな小道を見つけ出すことができますと信じます。」¹⁾ (レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」)</p> |

(2) 下位指標とネイチャーライティング及び環境文学の類似点

下位指標のうち、ネイチャーライティング及び環境文学に近いものを実際のテキストと比較した。表4は「自然への感謝・喜び」に分類できた回答についてまとめたものである。

表4 下位指標とネイチャーライティング及び環境文学の類似点

| 上位指標 | 下位指標 | 調査対象者の記入例 | 類似したネイチャーライティング または環境文学のテキスト |
|-----------|---|---|---|
| 自然への感謝・喜び | <p>(朝日を見て)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幸せ！生きてる！がんばろう(11) | <p>(雪中泊を終えて)</p> <p>翌朝、朝日を見た際は、「人として新たな1日がまた始まる。がんばろう。」と純粋な心でいられた。(3年男子)</p> <p>木々の間から太陽の光がさしてきた時、こんなふうくにみんなの心を暖め、みんなの中心であり、みんなを照らしてあげられる人間になろうと誓った昔を思い出しました。(4年男子)</p> | <p>「日ごとに訪れる朝は、私に向かって、自然そのものと同じように簡素な-あえて言えばけがれの無い-人生を送ろうじゃないかと、ほがらかに呼びかけていた」⁷⁾ (H.D.ソロー「森の生活」)</p> <p>「よい思想が到来するとわれわれの前途は明るくなる」⁷⁾ (H.D.ソロー「森の生活」)</p> |

ネイチャーライティング及び環境文学の教育的意義

上位指標「自然への感謝・喜び」の下位指標「(朝日を見て) 幸せ! 生きてる! がんばろう」が下位指標の中で最も数が多かった。これはソローの「森の生活」の「日ごとに訪れる朝は、私に向かって、自然そのものと同じように簡素な-あえて言えばけがれの無い-人生を送ろうじゃないかと、ほがらかに呼びかけていた」⁷⁾「よい思想が到来するとわれわれの前途は明るくなる」⁷⁾などに通じ、受講者11人、約33%がソローの一文と同じ感覚を有したことがわかる。11人中9人は「森の生活」を読んでおらず、妙高の冬の自然に触れての独自の発想であることがわかる。

5.3 雪上キャンプ実習受講者の感想に見る「交感の原理」と「場所の感覚」

(1) 雪上キャンプ実習受講者の感想に見る「交感の原理」の具体例

表5は雪上キャンプ実習受講者の感想と「交感の原理」についてまとめたものである。上位指標「自己の内面」「思い出」については、すべて自然を見て想起された感想であり、ここでは受講者たちが見た具体的自然が「外なる自然」、その感想が「内なる自然」と読み取ることができた。「自己の内面」について38人、「思い出」については39人が答えており、受講者33人のうち少なくとも一人一つ以上の答えを有した結果となり、ほぼ全員に「交感の原理」が作用していたことがわかる。

表5 雪上キャンプ実習受講者の感想に見る「交感の原理」の具体例

| 上位指標 | 下位指標 | 外なる自然 | 内なる自然 |
|-------|------------|-------------------------|---|
| 自己の内面 | 自分の性格(5) | 最終日の夜、とてもきれいな山と月を見て… | 自分の心はなんてきたないんだと思った。自分の行動が女々しくてちっぽけな小さい男だから、空のデカさや月の明かりの壮大さから感じてしまった。(4年 男子) |
| | | 雪中泊で朝日を見た時… | 小学生の時のスケート大会の朝を思い出した。小学生の時の地方大会では、早朝に車で送ってもらうことが多く、あの頃は「今朝も朝日を見れたし頑張ろう」という気持ちで向かっていました。17年近く続けてきたスケートもあと1年で終わってしまうので、小学生の頃からここまで続けさせてくれたことが本当にありがたいなと思いました。(3年女子) |
| 思い出 | 小さな頃のこと(5) | 雪洞を掘っていた時、木の枝がたくさん出てきて… | 亡くなったおじいちゃんのことを思い出した。おじいちゃんは林業をしていて、木の種類や枯れた枝と生きている枝の違いを教えてくれたから。まだ保育園くらいときだったので、そのことを思い出してなつかしくなった。(2年 女子) |

(2) 雪上キャンプ実習受講者の感想に見る「場所の感覚」の具体例

表6は雪上キャンプ実習受講者の感想から「場所の感覚」についての記述をまとめたものである。上位指標「自己の内面」「思い出」からは、度々、場所を想起した感想が見られた。先でも述べた通り、「場所の感覚」はネイチャーライティング及び環境文学の根幹をなすものであり、自己の「場所」としての「故郷」を「空間」「場所」に転じたとき、その場所における関係性を相互的に受容しているという安定感を獲得して、「居場所」へと醸成されたときに感じる認識である。妙高の地はほとんどのものが初めてであり、妙高に「場所の感覚」を持つものは1名のみだった。この6日間の自然体験から「生まれた家のこと」「家族の思い出」「松本の思い出」（参加者全員1年次に松本キャンパス在）など、他の場所にも「場所の感覚」を有する感想が「自己の内面」「思い出」の中に見られた。

表6 雪上キャンプ実習受講者の感想に見る「場所の感覚」の具体例

| 上位指標 | 下位指標 | 調査対象者の記入例 | 「場所の感覚」を有する所 |
|-------|-----------|--|-------------------------------|
| 自己の内面 | 帰る場所のある幸せ | 雪洞にいたときは朝になったら一刻も早く帰ろうと考えていた。その中で、帰る場所があることがそれだけで安心できる気持ちになりありがたさを感じた。 | 国立妙高青少年自然の家 キャンプサイト(2年 女子) |
| | 家族の思い出 | 雪洞をつくる場所が実家の近くの森に似ていて、家族のことを考えた。 | 実家(3年 男子) |
| 思い出 | 松本の思い出 | 妙高山を見たとき、松本に居た時を思い出した。北アルプスも似たようにキレイだったから。 | 松本(3年 女子) |

6. 考察

6.1 国語教育の教材を新たにネイチャーライティング及び環境文学の視点から学ぶ

(1) 宮沢賢治「やまなし」を、環境文学として捉えて学ぶ授業

宮沢賢治の「やまなし」¹²⁾は1924年大正14年に書かれて以来広く親しまれ、昭和46年度版から現在まで、光村図書6年生²⁵⁾に継続して採用されている。

難解とも言われる「やまなし」で、「クラムボン」の存在に焦点があたりがちだが、この2匹の蟹の兄弟と蟹の父親が、環境文学における「場所の感覚」を感じているのは谷川であり、この谷川だけが蟹の世界の全てである。教科書が対象としている小学校6学年は、まだ社会に広くでる年齢ではない。小学6年生にとって、学校と家庭、その学区となる地域が蟹の親子にとっての谷川であり、「場所の感覚」のある所である。このように、環境文学の定義をもってテキストを整理していくと、蟹にとっての谷川が地域であるならば、クラムボンは自分自身にとって何であるのか。友達か、従兄弟か、兄弟なのか、といった視点で捉えることができ、クラムボンが蟹か魚なのかということより、クラムボンが蟹にとって、または自分にとってのどんな存在であるかという根本的問いに迫ることができる。

(2)「おくの細道」を自然や環境を「心の問題＝自分との関連」で考える契機に

松尾芭蕉¹⁷⁾の「おくの細道」は光村図書中学校3年教科書²⁴⁾に「夏草—『おくの細道』から」の題目で採用されており、多くの中学生が学ぶ古典的ネイチャーライティングである。

内田²⁶⁾は「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」などの芭蕉の秀句について「あわれ、わび、静寂、枯淡、孤高といった深い調べ御作品でありまして、無常観を持ってゆく芭蕉の風狂の精神を深く表現した」と述べており、俳句は自然や環境に自身の精神を深く表現することが可能なツールである。よって芭蕉の句を学びつつ、中学生が俳句を作るとは、芭蕉に並ばずとも、自然の姿に自身の精神を表現する好機となる。「文学を通した（森林）環境教育」で松岡²⁷⁾が述べたことを芭蕉の例にあてはめると、生徒たちは芭蕉の句に触れた「文学体験」により自然や環境へ目を向ける契機を得ており、その後俳句を作ってみることで、さらに自然や環境への考えを深め、段階を踏んで「心の問題＝自分との関連で考える」という視点で自然や環境を捉えるところまで、学習を深めることが可能となる。

6.2 「生きる力」育む教育に対してのネイチャーライティング及び環境文学の可能性

平成8年中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」²⁾が重視する「生きる力」と、カーソン¹⁾の「センス・オブ・ワンダー」には親和性があり、特にカーソンのいう「『地球の美しさ』と『神秘さを感じとれること』」は中央教育審議会の「感動する心」に近く、カーソン¹⁾のいう「人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてない」ことは中央教育審議会²⁾の「生きる力」とも捉えることができ、ネイチャーライティング及び環境文学には「生きる力」を育む教育的意義があるのではないかと推測した。

カーソンの「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」¹⁾と同義と捉えられる「自然への驚き」の感想を有する者は、雪上キャンプ実習受講の学生の58%、冬の子どもキャンプ教室及び子どもキャンプ教室の児童全員であり、総じて自然体験は「生きる力」向上の要因となり、カーソンが述べる「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」¹⁾はその大きな要素であることがわかった。

「文学を通した（森林）環境教育」の松岡²⁷⁾が述べているように「『文学体験』が、読者が自然や環境を『心で体験』し、現実感覚を伴った視線を向ける契機を持つもの」ならば、ネイチャーライティング及び環境文学を教育現場に広く用いれば、多くの児童生徒学生が自然へと向かう契機となり得、図2のような道を辿ることができる。



図2 ネイチャーライティング・環境文学を用いた学習モデル

この道筋を作るためには、ネイチャーライティング及び環境文学を教育現場に広く用いること、またこれまでの教育をネイチャーライティング及び環境文学的視点で見直すことが重要である。

7. まとめ

内田²⁶⁾が「今日の自然環境破壊を進行させてきた人間の文化の強大な根源的な衝動諸力を前にして、自然と人間と文化の再生はいかに可能か、という問題関心からすると、景観概念ではやっていけない、と思われるのです。そのためにはぜひとも、一方で、風景概念のそのものの原点、すなわち自然風景に立ち返らねばならないと思いますし、他方でその場合の人間の覚醒、すなわち風景において自然の生命とところを監督する風景感情の覚醒が生ずることが重要です。」と述べるように、自然をただの「景観」ではなく、「風景」として愛着のある特別な場所として感じるには「自然の生命とところを監督する風景感情の覚醒が生ずることが重要」であり、ネイチャーライティング及び環境文学の構成要素である「内なる自然」と「外なる自然」の呼応する「交感の原理」における心の反応こそ、「自然の生命とところを監督する風景感情の覚醒」ともいえる。

ここでの研究結果のように、多くの学生が雪洞で一泊した次の日の朝日にソローと同じ文脈の感想を有するなど、印象的な自然体験をした者は「交感の原理」が起き、延いては「風景感情の覚醒」がおきていることがわかる。その場所全体という「風景」に対して覚醒をおこしていく可能性を秘め、その「覚醒」が風景のある所を「場所の感覚」のある場所へと昇格し、ネイチャーライティング及び環境文学の根本的感情へとつながっていく。

松岡²⁷⁾が言う、ネイチャーライティング及び環境文学の「文学体験」が、読者が自然や環境を「心で体験」し、現実感覚を伴った視線を向ける契機を持つものであることを実感してきたが、文学にあまり関心がないものや、文学経験がまだ乏しい子どもたちに、「交感の原理」や「場所の感覚」を感じる素地があるのか疑問であった。しかし、雪洞で過ごした次の日の朝日に対し、3割の学生がソローと同じ文脈の感想を持ったり、ほとんどすべての子どもたちがカーソン¹⁾の提唱する「センス・オブ・ワンダー=神秘さや不思議さに目を見はる感性」を感じたりしたことから、大人は「交感の原理」や「場所の感覚」を十二分に感じており、子ども達においても「交感の原理」や「場所の感覚」が育まれていく可能性が大いにあることが明確となった。また、松岡²⁸⁾がいう「現実感覚を伴った視線を向けること」に関しても、雪上キャンプ実習のような自然体験活動は、自然に「現実感覚を伴った視線を向けること」につながることもわかった。よってネイチャーライティング及び環境文学の文脈や素地は多くの人の心であり、①文学体験→②自然への関心の契機→③（雪上キャンプ実習や子どもキャンプ教室のような）現実感覚を持った自然体験→④「生きる力」の向上という道筋が可能であることが明らかとなった。

参考・引用文献

- 1) レイチェル・カーソン(1996), 「センス・オブ・ワンダー」, 上遠恵子訳, 新潮社
- 2) 中央審議会(1996), 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申, 文部省), www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm
(閲覧日:2023. 11. 29)
- 3) 上岡克己(2015), 「教室の中のレイチェル・カーソンー環境文学教育の可能性を求めてー」, 国際社会文化研究, 第16号, pp23-33
- 4) 大野美沙編(2012), 「シリーズ:エコクリティシズムの名作」, エコクリティシズム・レビュー, 第五号, 2012
- 5) 文学・環境学会編(2000), 「たのしく読めるネイチャーライティング」, ミネルヴァ書房
- 6) 野田研一(2003), 「交感と表象 ネイチャーライティングとは何か」, 松柏社
- 7) H.D ソロー(2016), 「森の生活 上/下」, 今泉吉晴訳, 小学館文庫
- 8) 伊藤俊太郎(1999), 「一語の辞典 自然」, 三省堂
- 9) レイチェル・カーソン(2004), 「沈黙の春」, 青樹築一訳, 新潮社
- 10) アニー・ディラード(1991), 「ティンカークリークのほとりで」, 金坂留美子 くぼたのぞみ 訳, めるくまーる社
- 11) 宮沢賢治(2015), 「注文の多い料理店」, 28版, 角川文庫
- 12) 宮沢賢治(2018), 「セロひきのゴーシュ」, 28版, 角川文庫
- 13) 小谷一明 巴山岳人 結城正美 豊田真弓 喜納育江(編)(2014), 「文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック」, 勉誠出版
- 14) ギルバート・ホワイト(1992), 「セルボーン博物誌」, 野間佐和子訳, 講談社
- 15) ヴィルヘルム・カール・グリム/ヤーコプ・ルードヴィヒ・グリム(2014), 「初版 グリム童話集 1」, 吉原高志・吉原素子訳, 白水uブックス
- 16) 筑摩書房編集部(2014), 「ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉レイチェル・カーソンー『沈黙の春』で環境問題を訴えた生物学者」, 筑摩書房
- 17) 松尾芭蕉(2001), 「ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 おくの細道(全)」, 角川書店編, 角川文庫
- 18) 文部科学省(2018), 「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語」, 初版, 東洋館出版社
- 19) 宮沢賢治(1986), 「宮沢賢治全集I 『春と修羅』『春と修羅』補遺『春と修羅 第二集』」, ちくま文庫
- 20) 石牟礼道子(2004), 「苦海浄土」, 講談社文庫
- 21) 石牟礼道子, 渡辺京二, 見田宗介, 大岡信, 菅野昭三, 志村ふくみ, 辺見庸, 高田宏, 岩岡中正, 栗原彬, 多田富雄, 司修, イバン・イリイチ(2004), 「石牟礼道子のコスモロジー 不知火」, 藤原書店

- 22) グードルン・パウゼヴァング(1987), 「みえない雲」, 高田ゆみ子訳, 小学館
- 23) 田口ランディ(2016), 「ゾーンにて」, 文春文庫
- 24) 甲斐睦朗ほか 29 名(2021), 国語 3 中学校国語科用, 光村図書
- 25) 甲斐睦朗ほか 43 名(2020), 国語 六 創造 小学校国語科用, 光村図書
- 26) 内田芳明(2001), 「風景の発見」, 朝日新聞社
- 27) 松岡幸司(2018), 「文学を通じた(森林)環境教育」, 日本森林学会大会発表データベース, 第 129 回日本森林学会大会, 学術講演集原稿, 2018, 抄録
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jfsc/129/0/129_237/article/-char/ja/
(閲覧日:2023. 11. 29)

(2023年11月30日 受付)
(2024年 2月29日 受理)